

カナダでのポストドク経験

広島大学大学院教育学研究科心理学講座 准教授

中尾 敬 (なかお たかし)

私は2009年5月から約3年間、カナダのオタワ大学にあるゲオグ・ノートフ (Georg Northoff) 教授の研究室でポストドクとして活動する機会を頂きました。

オタワはカナダの東側に位置する人口100万人程の小さな街ですが首都です。札幌よりもやや緯度が高く、長くて寒い冬を経験しました。しかし夏はたいへん過ごしやすく、半地下の部屋を借りていた私には冷房の必要はありませんでした。冬は夕方4時位には暗くなり、夏は夜10時位まで明るいといった季節の変化も新鮮でした。

オタワは英語圏のオンタリオ州にあります。フランス語圏のケベック州との州境に位置しています。そのため英語とフランス語のバイリンガルが多く、英語の拙い日本語モノリンガルの私にとって新鮮な経験をする機会が多々ありました。例えば、留学して間もなくお店に行った際、レジの人に何かを英語で尋ねられたのですが、私は上手く聞き取ることができず一瞬固まってしまいました。するとレジの人はすぐにフランス語で言い直してくれて、私は戸惑い更に固まる、といった苦い経験をしました。その程度の英語力で留学した私ですが、ノートフ教授をはじめ、研究室のメンバーの寛容さにも支えられ、3年経つ頃にはそれなりに英語でコミュニケーションがとれるようになっていました。

研究室には生物学、哲学、医学など様々なバックグラウンドの人が在籍し、MRIや脳波等を用いたニューロイメージング研究を行っ

ていました。そのため、心理学とは異なる観点からの議論や研究に触れることができました。例えば、心理学のように心に関する構成概念やそれに関わる理論から研究のアイデアを紡ぎ出すというよりは、脳を含めた神経系がどのように機能しているかをまず考え、そこを調べた結果から心理レベルの構成概念について考察するというアプローチが取られていました。

これは心理学を学んできた私とはアプローチの方向が逆で、たいへん興味深いものでした。確かに心理学における構成概念に沿って脳が機能しているという保証はどこにもなく、脳機能について理解した上で心を捉え直すことで、より節約的で生理学的基盤に沿った心の理解が可能になるかもしれないと感じました。しかし裏を返せば、心理学者が重視する心に関する構成概念の綿密な定義はないがしろにされたまま議論が進められるという側面もありました。また、心理学における実験で見受けられるような巧妙な実験操作についてのアイデアは少ないように感じました。脳と心という学際的な領域において、心理学者の強みはそのあたりにあるのかもしれませんが。

日本の研究環境との違いとして感じたことの一つは、議論の場でのポストへの意見の仕方です。日本ではどうしても目上の人には遠慮をしていますが、あちらでは研究室のポストにもラボメンバーが遠慮なく言いたい放題でした。そのような状況をノートフ教授も好んでおられましたし、自分



Profile—中尾 敬

2006年、広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻博士課程後期修了。博士 (心理学)。日本学術振興会特別研究員、海外特別研究員などを経て、2015年より現職。専門は認知心理学、生理心理学。著書は『自己を知る脳・他者を理解する脳 (社会脳シリーズ6)』(分担執筆、新曜社) など。

も将来そのような環境が作れたらと思ったものです。

オタワの東にはフランス語圏の都市モントリオールがあり、南西にはカナダ最大の都市トロントがあります。モントリオールにはペンフィールドが勤務していた名門のマギル大学と脳のMNI座標で有名なMontreal Neurological Instituteがありました。またトロントにはトロント大学があり、そこではうつ病の治療として深部脳刺激療法が実施されており、その治療の際にはヒトの脳細胞の活動電位を記録する実験が実施されていました。これらの場所を訪れ、最新の治療や実験の現場を見せていただいたこともたいへん印象に残っています。

オタワでは研究面だけでなく生活面でも様々な経験をし、不安や苦勞もありましたが、貴重な時間を過ごせました。また留学したことにより日本の良さも実感を持って理解できたと思っています。日本が大好きな方にも、留学を強くおすすめします。